

# 長崎大学の個性化に向けて

## 第2回 長崎大学運営諮問会議



平成13年 1月

長 崎 大 学



## 第2回長崎大学運営諮問会議

開催日 平成13年1月27日(土) 14:00~16:30

場所 長崎大学 事務局 (長崎市文教町1-14)

### 運営諮問会議委員名簿

会長	福地 茂雄	(アサヒビル(株)代表取締役社長)
副会長	横山 哲夫	(玉木女子短期大学長)
	雨宮 忠	(日本体育・学校健康センター理事)
	片岡 千鶴子	(長崎純心大学長)
	金子 原二郎	(長崎県知事)
	川下 満之	(長崎県高等学校長協会会長・長崎県立長崎東高等学校長)
	草野 仁	(テレビキャスタ)
	富永 明	(三菱重工業(株)取締役 長崎造船所長)
	野崎 元治	(長崎商工会議所会頭・十八銀行代表取締役会長)
	ブライアンF バクガフニ	(長崎総合科学大学地域科学研究所 教授)

#### 表紙の説明

工学部が地元民間企業と共同開発した階段昇降機

熱帯医学研究所教官のラオスにおけるデング熱媒介蚊発生源調査活動風景

水産学部附属練習船「長崎丸」

## 目 次

1 . 学長挨拶 池田高良 長崎大学長.....	1
2 . 議事要旨	
1 ) 開 会	
(1)開会挨拶 福地茂雄 アサヒビール(株)代表取締役社長.....	2
(2)委員の所属等の変更について.....	2
(3)配付資料の確認.....	2
2 ) 大学改革の進捗状況について.....	3
3 ) 長崎大学の個性化について	
(1)諮問事項「長崎大学の個性化について」の説明.....	3
(2)「教育における特色」について.....	4
(3)「研究における特色」について.....	4
(4)各委員からの意見等	
①長崎大学の個性化.....	5
②大学改革の取り組み状況.....	8
③地域との連携.....	11
④産学連携.....	12
⑤情報発信.....	12
⑥その他.....	13
(5)今後の会議運営について.....	14
(6)閉会挨拶（池田学長）.....	15
4 ) 長崎大学の「個性化」について（欠席委員からの意見）.....	15
3 . (参考)大学改革の進捗状況の主要項目（池田学長説明概略）.....	18



## 池田 長崎大学長挨拶



第1回目の運営諮問会議では、長崎大学の現状と課題として「長崎大学大学改革案」を中心に意見を伺ったが、第2回目としては「長崎大学の個性化」について意見を伺いたい。

近年の我が国における少子化と大学の大衆化の傾向、地方では国際的環境の中で、大学が科学の進歩に貢献していくためには、各国立大学はより明確な個性を表す必要がある。長崎大学においても、本来もっている特色を生かし創造的で魅力ある大学を造ろうと努力しているところである。

なお、当運営諮問会議は「大学が外部有識者の意見を聞き、教育・研究及び運営の改善に資するため」として、国立学校設置法により設置されており、大学の会議運営に対する役割は「審議する事項について、提案を行い、会議運営について補助すること」となっております。

本日の諮問事項は「大学の個性化について」ということで、事項によっては、部局が関わってくることもあり、また、学長として運営諮問会議委員の意見を直接聞かせたいという希望もあって部局長等を列席させて頂いた。

大学改革については、今後も、その進捗状況を逐一報告するが、大学が置かれている状況には厳しいものがあり、本学を国際的に通用する大学にするため大胆に改革を進めていかなければならないと考えている。

一方、地方に貢献することも求められており、今後、大学は国際的にも地域においても「個性」を示さなければ、生き残れない状況になってきている。

本日は、各委員の方々に個性化等について忌憚のない御意見・御助言・勧告をお願いしたい。

今後、運営諮問会議の意見を参考に、さらに、大学改革を進めていきたい。



## 1 開 会

### (1) 福地会長開会挨拶

御繁忙中に出席頂いたお礼及び金子委員が所用のため3時頃に退席すること並びに草野委員が東京地方の大雪により、羽田空港で飛行機の離発着ができないため急遽欠席となった旨の挨拶があった。



### (2) 委員の所属等の変更について

会長より、第1回運営諮問会議以降、次の者の所属等に変更があった旨の紹介があった。

- 雨宮 忠委員 日本体育・学校健康センター理事  
(前地方公務員共済組合連合会理事)
- 横山 哲夫委員 玉木女子短期大学長

### (3) 配付資料の確認

廣瀬長崎大学事務局長より、次の会議配付資料の確認がなされた。

第2回長崎大学運営諮問会議次第

資料1 長崎大学運営諮問会議委員名簿

資料2 大学改革の進捗状況

資料3 長崎大学の個性化について

(競争的環境の中で、真に個性ある大学造りを目指して)

参考資料：「長崎大学の個性化について」(詳細版)

長崎大学における教員の個人評価指針等の制定について

長崎県における単位互換制度の実施について

長崎大学学術交流協定関係交流実績

## 2 )大学改革の進捗状況について

池田学長より、資料「大学改革の進捗状況」を参考に平成12年4月以降に実行された大学改革の主要項目の説明があった。また、部局改革の進捗状況については、行動計画を作成して改革に取り組んでいるが、改革に関する質問は、審議の中で回答する旨が述べられた。

福地会長より、大学の改革状況に関しては、各方面にわたり改革の実行が進んでいるようだが、日本人は、改善はうまいが改革は下手と言われているので、改革レベルのことを積極的に進めて頂きたい。多方面からも長崎大学の改革案は進んでいると言われるので、さらに改革を進めて貰いたいとの要望があった。

## 3 )長崎大学の個性化について

### (1) 諮問事項

#### 「長崎大学の個性化について」の説明



池田学長より諮問事項の説明が次のとおりあった。

「個性化という意味は、言葉自体が非常に難しく、いろいろな視点から個性という問題を取り上げることができるが、本日は、長崎大学の組織体としての個性ということで審議をお願いしたい。諮問にあたり、最初に両副学長が長崎大学の特色を説明し、それを如何にして、個性に育てていくことが出来るか、また、それが特色であり得るかなどについて御意見を伺いたい。」旨の説明があった。

## (2)「教育における特色」について

橋本副学長より，長崎大学における教育の特色が説明された。

主要事項；

- ① 総合大学としての人的資産を生かしたカリキュラム編成と授業の充実
- ② 地域における教育のCOEとしての充実
- ③ アジア諸国との教育交流及び教育連携
- ④ 教員の教育活動の評価（教員の個人評価）

## (3)「研究における特色」について

渡邊副学長より，長崎大学における研究の特色が説明された。

主要事項；

- ① 放射線の生体影響と放射線障害医療の研究
- ② 特殊感染症研究の世界拠点
- ③ 長崎の地域的，地理的特徴に関する研究
  - ア 火山（普賢岳）災害に伴う調査研究及び被災者の精神的影響研究
  - イ 長崎の環境特殊性を生かした研究
  - ウ 海洋環境保全と海洋生物資源開発に関する研究
  - エ 東南アジア経済研究
  - オ 長崎西洋学

## (4) 各委員からの意見等

福地会長より各委員に対し，長崎大学改革の進捗状況と長崎大学の個性化についてのプレゼンテーションを受けたので，改革状況に関する質問及び長崎大学の個性化についての意見を伺いたい旨の発言があり，各委員より次のような意見等が出された。

## ① 長崎大学の個性化

● 長崎県は、離島が多いという特徴があり、長崎大学の個性化の一つとして離島医療・地域医療への一層の取り組みが重要である。

---

● 長崎県内の水産業は、漁場の荒廃と資源の枯渇、環境問題、さらに、沿岸漁業では磯焼け問題があり、このようなことについて研究して欲しい。特に離島は、水産業なくして生きて行けないのであり、県と連携し、官民あげて取り組み、個性ある大学造りの中で積極的に生かして欲しい。

---

● 放射線の問題など、全国でも突出した研究をしているが、そのような研究の姿勢が学部教育の中でどういう形で特色となって生かされているのか。例えば、研究の分野は、海外との相互交流がなされ、国際的な研究が行われている。それは学部教育の中でも国際化が、長崎大学が目指す大学の個性であり、特色として見えるものでありたい。直接、放射線や感染症などを勉強することではないが、国際的な教育研究レベルのものが学部教育でも掲げられていれば、全国の若者が、国際的な教育が実施されているので長崎大学を希望し、長崎の若い人達も東京や関西へ行かなくても長崎大学に入学することを誇りにするようになるであろう。

長崎大学の目指す個性化が具体的に、学生の教育或いは人間形成の面にどのような形で反映されるかが課題である。

---

● 個性化は、企業の中では差別化ということで用いているが、そういう意味での個性は、小さく纏まった個性ではなくて、他に勝つためにどうするのか、大学でも他に勝つ個性を造ることが必要である。

---

● 総合大学としての人的資産を生かしたカリキュラム編成と授業の充実、地域における教育のCOEとしての充実、アジア諸国との教育交流及び教育連携、教員の教育活動の評価（教員の個人評価）と、大枠4つの事項があるが、大学は、教育の質、授業の質がポイントである。しかし、提案されていることは、全体的に極めて良い提案であり賛成である。



- 研究における特色は、良く理解できたし、日頃から理解と尊敬をしている内容が多かったが、必ずしも、全学部、学科が網羅されているものではなく、研究についても、個性化ということなら、それぞれの学部、学科毎に特色を出すアクションも必要である。

- 国際化という観点から、長崎大学が特色を出すことが個性化に繋がると考える。国際化という面では、どの大学も同じような取り組み方をしているが、長崎大学の規模から考えると外国人交流学生の数は少ない。

長崎大学は、アジア諸国と距離的に近く、文化的に近いことから、アジア諸国との交流の促進を方向づけしている。長崎大学にとって、大学間交流の締結に基づく研究者交流及び学生交流等の一般的な交流のままで良いのか、外国人が増える要素を備えている特色ある部局は別にしても、長崎大学に留学生等が増加する施策を考える時期に来ている。長崎大学に若いアジアの人が留学して来ると、日本にとっても大きな国際化の意義をもつ。

- 海の環境保全、環境問題は、長崎大学にとり大きな役割がある。諫早干拓も環境保全と経済発展の対立のモデルケースのように感じる。長崎大学を中心に環境保全と経済発展の両立を図る研究を長崎県全体として取り上げたらよい。

- 長崎の街は海を中心にして発展した町だが海洋博物館がない。長崎大学を中心に海洋博物館を設立し、その中に含まれる長崎学の発展を図ることが、海という最大の特徴を生かすことになる。

- 個性というのは個人ということがいえる。長崎大学の顔が見えないとは、人が浮かんでこない。ユニークな教育、ユニークな教員、他のところでないような研究する教員に長崎大学で研究しやすい環境を提供し、そういう人を登用することが出来たら良い。

- 個性化というものは、各教官の特色を高めていくことで個性が出来てくる。現在のものを積極的に伸ばすことである。種をまき肥やしを施し、育てて個性を発揮させるのか、それ以外の方法を取るのか、どちらを選ぶのか手段がはっきりしていない。



● 総合化と個性化の兼ね合いで、総合化を考えると、個性化は手薄になる。長崎大学は、法学部，文学部，理学部，社会学部，農学部はなく，応用自然科学に徹してきた歴史的経緯があり，それが特色ともなっている。それを，さらに伸ばしていくか，抜けているところを埋めていき総合化の努力をしていくか。各部署が特色を発揮していく方法もあるが，果たしてうまくいくか疑問である。自然体で個性化が育つのを待つのか，積極的にこ入れをしていくべきか，少々偏っても，特徴を伸ばしていく方法がいいのか，スーパーマーケット方式か，専門店方式でいくのか，国立大学の独立行政法人化が目前であり，悠長なことは言っておれない。総合化，個性化，自然体と各教官が意思統一をして，戦略を立てたらよい。

---

● 総合大学の中での差別化を考え，長崎大学で個性化を押し進めていくと，長崎医科大学，長崎経済大学，長崎水産大学，長崎薬科大学などがより個性がある。総合大学としての個性化は，各学部の縦軸と同時に，例えば，海洋だとか，アジアという横軸があり，それが総合大学の個性化ではないか。

---

● 教育と研究の個性化の柱が，長崎の環境の特殊性を生かした研究として，環境科学部を重視しており，環境科学部の成果が長崎大学の価値を決定するよう見受けられるが，性急な求め方では歴史の浅い環境科学部自体がうまく育つか心配である。

---

● 21世紀のキーワードは，オリジナリティである。全てが横並びでは駄目ということで個性化の問題が起きているのだが，個性化の問題も九州の各大学の場合，考えていることはアジアなどのテーマで同じであるから，これらと，どう差別化するかが大事である。

---

● 他にない新たなことを計画するのではなく，長崎大学として人間的な繋がりとか，地域との繋がりを大切にして歴史的な立場とか，地理的な立場から教育研究を進める。この充実があれば，これが，長崎大学というものになっていく。

- 個性化の内容の問題について、ある企業の長崎大学卒業生の30, 40代の70人に長崎大学の改革についてアンケート調査を行い、ポイントを調べた。長崎大学のコア・コンピタンスとは何か。

1位 歴史と伝統（伝統のある学部を有している）

2位 頼りになる沢山の先輩が各企業で活躍している

学生OBとともに、上下や同級生の交流、繋がりが深い。

東南アジアの問題、長崎の知名度の問題など、個性化で説明されている問題が多かった。

## ② 大学改革の取り組み状況

- 大学として、種々積極的に取り組まれていることに、心から敬意を表する。

- 第1回の時に、改革案を拝見して、広範多岐にわたる内容が盛り込まれ、全て同じエネルギーで取り組んだら大変であり、ある程度、集中的に実施するとか、部局部分は、部局に任せる方が良いのではなかと考えていたが、改革資料を拝見し説明を伺うと、熱心に取り組んでいる様子が理解できた。

- 学部横断的な教育支援組織（総合教育研究推進機構）の設置に関連して、教育課程の大綱化というものを受けて、いろいろな大学で教養部を廃止して、一般教育の運営組織が様々な形になってきたが、知りうる限り教養部をなくしてすっきりうまくいくようになりまして、というようなところもない様子と理解をしている。

長崎大学で、総合教育研究推進機構という学部横断的なものを設ける趣旨、全学4年間一貫して、教養も含めた専門教育を完成することについて、どのようなカリキュラムを作成し、どういう教員配置を行い、所掌範囲としてどこまで考えているのか。また、この組織は何を課題にする組織なのか。

ここで具体化しているのは、教員評価部門、アドミッションオフィス、ファカルティ・ディベロップメントの実施や周辺的な事柄が書いてあるが、そもそも、全学的に教育を実施するという大きな趣旨目的があるが、そういうことに関し、部局との関係でどのような位置取りにな



るのか、或いは、どこまで出来そうなのか、課題としてどこまで具体の目安を立てていくのかを示して欲しい。

---

- 少人数教育について、授業の規模を小さくして教官と学生とのコミュニケーション密度を高めることは良いことである。「平成14年度から各クラスを100名以下にすること」と、数値目標を立てているが、たしかに、300名、400名では大変だ。しかし、科目によっては、学生に人気のある授業がある。その場合、定員が一杯であるという理由で次回廻しにするとか、人数を制限するということのようなのだが、あまり固定的に考えるのには問題がある。良い授業というのは、そんなにあるものではないし、4年間の学生時代に一度でも一時間でも聞いたものが、一生涯残るものであれば、それだけでも十分であるという見方もあると思うので、数値目標をあまり一律的な物差しで計るのはどうかと考える。
- 

- 教員の個人評価の実施について、大方の賛同を得られているということだが、勤務評定を出来るだけ客観的なものにしたいということで、種々項目を設定されている。種々問題はあろうが、こういうことを実施して試みしてみる価値はあると思う。
- 

- 教育活動の評価で教育担当の実績、教育の質、学生による授業評価まで項目があるが、これについてもとにかくやってみる。やってみて、ここに固定しないで、やってみたがうまくいかなかったり、その先生の全体の能力を表現出来ていない事柄がでてくるかもしれないので、あまり固定的にならない方が良い。
- 

- 学生による授業評価は、評価をどう発表するか、どう生かすかが難しい。学生による評価で人気が高い、低いが必ずしも教員の教育評価と一致しないことがある。学生による授業評価を軽んじるわけではないが、これ自体をどう評価するか、或いはどう生かすかということも考えて頂きたい。

- 長崎大学での各種アンケートの集計があり、その中では、学生が学校を離れてはあまり勉強していないことや、授業に不満などがあったので、教育指導，講義の中身を充実して欲しい。また、企業側からは、卒業してくる学生の基礎学力が不足しているとの声もあり、もっと教育に力を入れて欲しい。
- 

- 本日、提案の4項目（総合大学としての人的資産を生かしたカリキュラム編成と授業の充実，地域における教育のCOEとしての充実，アジア諸国との教育交流及び教育連携，教員の教育活動の評価）について、具体的に展開していただく必要がある。総論ではなく、アンケート等の結果を受けとめ、どう展開していくか。そして、半年後，1年後，或いは3年後にどのように変わっていくのか，提示資料は関心を持って見せて頂いた。
- 

- 教官の意識改革や能力開発を一生懸命やる。これが、ファカルティ・ディベロップメントに繋がってくる。ファカルティ・ディベロップメントは、個人評価とセットになっている。アメリカでは、ファカルティ・ディベロップメントの長い歴史と経験がある。日本では、初めてであり、長崎大学でも初めてである。日本では講座制の基で教育を受けている人が多いが、アメリカでは、初任者教官の研修を受けてから教員となっているので現職教官の研修ができる。日本では初任者研修の制度がなく、一挙に現職教官を一諸に実施するのは難しい面や食い違いはあるのできめ細かくやって欲しい。
- 

- 企業の経営手法を国立大学も取り入れて良いと考える。  
例えば、戦略の決定については「物事を決める」「物事を執行する」という両方のミッションを明確に分ける。大学では、教育と学校運営ということが戦略の決定と執行ということになっていると考えられるが、国立大学の場合、両方全部が教授のところで行われている。極力、運営の面と教育の面は分けて取り組むところがあっていいと考える。
- 

- いろいろな改革案，個性化のための案は、いつまでにするのか。  
“fast eats slow”早きが遅きを喰うという本が出ている。他大学との改革案の比較は大事だが、他大学よりも早くすることが大事である。



- いろんな研究のテーマが沢山あるが、リーディングスタンダードを持つ、カテゴリートップとなる必要がある。

### ③ 地域との連携

- 県内大学間の単位互換は、長崎大学が中心となり積極的に取り組んで頂いたのでうまく運んだ。長崎県全体のレベル向上は、競争のみではなく、県内の大学が協力し合い知恵を出し合うことが必要だが、そのためには長崎大学が中心にならねばならない。これが単位互換制度だけで終わるのではなく、他にもやるべきことが山積しているのでもう少しお願いしたい。

- 長崎県では、平成13年度から、高校の個性化について積極的に取り組みたいと考えている。従来は、高校を増やすことに主眼をおいて高校の数を増やしてきたが、少子化の中で県内高校がどうあるべきかについて積極的に取り組みたい。また、離島の高校の在り方については、離島の高校を充実することにより、本土から離島へ進学するようなことも考えていきたいので、長崎大学からの協力もお願いしたい。

- 現職教員の資質の問題について、教員の再教育を実施したいので、その方法について支援をお願いしたい。

- 長崎大学は、ユニバーシティで、全ての学問、全ての分野が幅広く行われている。教養、音楽、芸術、公開講座、最先端の技術を「夢ライナー」として長崎県内各地で開催することが出来たことは本当に素晴らしい。

- 現在、長崎県は、校種間連携学力充実対策プログラムというのを実施している。小中の連携、中高の連携、高大の連携ということで、長崎大学教育学部からも支援・協力を頂いている。

#### ④ 産学連携

● 長崎県は、産業技術の面で製造業は進んでいるが、新しい時代に合ったITというものは、少々遅れているので、県内企業、長崎大学工学部、県の試験場が一体となり、積極的に共同研究し、交流出来ないか検討願いたい。

---

● 地元企業として、日頃から大学の協力を頂き、当方でも非常勤講師を派遣して講義をする機会があるが、真に企業が求めているところを大学の教職員・学生にも理解を頂く必要がある。いろんな形で大学から企業へアプローチをして頂く、企業からも大学へ出向く、それは、単に講義のみではなく、研究交流も含めた部分も広げて深めていき、個性化の一環に繋がることを出来ればと考えている。

---

● 有明海、諫早干拓について、県の水産試験場でも研究しているので、水産問題などについて水産学部と共同研究をお願いしたい。

#### ⑤ 情報発信

● 企業への発信とともに、高校生への発信をどのように考えるのか。お客様が高校生であることを考えると、もう少し情報提供を工夫すべきである。

高校、高校生と双方向のコミュニケーションをしていく。企業とのコミュニケーションが大事なように高校とのコミュニケーションも大事である。

---

● 高校生はお客様だから、高校との接点、高校との交流をもっともっと増やしていくべきである。

---

● ある新聞で大学ランキング2001年を出版しており、高校から見た総合評価があり、長崎大学と同規模クラスの九州の大学が上位にランクされていた。また、高校の先生が生徒に進めたい大学ランキングでも、九州の同規模クラスの大学が上位であった。長崎大学とその大学と何故、差があるのか、その差を洗って見たが、その大学は広報活動が盛んな大学であり、広報活動の1位が立命館大学、25位が同大学で、全国の国公立大学の中で同大学が25位に入るのはかなり高い。IT時代というものは、情報能力の発信の

差ということで、大学運営にも差が出てくる。いい作品を作っても、情報発信で相手に伝わらなかったら、それは死んでしまう。

## ⑥ その他

従来は、資格を与えるところで、長崎大学に入って、長崎大学を卒業したということで、内容は二の次であった。今からは、年功序列の制度から成果主義に移行する中で長崎大学で何かを学ぶ、技術を身につけることが大切である。学生もそれを悟ることが必要である。

日本の大手自動車会社が日本の本社などの会議を英語で行う。これからの企業の一つの傾向であり、長崎大学でも英語のための英語教育ではなくて、英語で何かの研究を行い、特定の施設では日本語禁止、そこでは、プレゼンテーションや交渉の方法など実践的英語教育を考えて頂きたい。インターネットも80%が英語である。

昔との比較は出来ないが、今の若者、全てがやる気を持った者が入ってきているわけではない。このような学生に、やる気をどう出させるかも教員の仕事である。学生が生き生きしているということが、充実の度合いを計るゲージになる。

結果を出す、つまり、一生懸命やっていることが、評価されなければ意味がない。それは、研究の進展であるとか、去年より今年、今年より来年であるとか、長崎大学で学んだ学生が卒業後、各方面、各分野で専門性を生かし活躍しているかである。

水産学部の海洋実習の中で実践的研究というのがあったが、21世紀においては、実践的研究が最大のテーマである。

センター試験に課す科目が増える方向にあるが、点数が高ければ良いという制度では問題があり、知育偏重の害が出てくると懸念される。センター試験は、資格試験的に取り扱うとか、一定のレベルに達している者から長崎大学の専門学部適合する資質を備えた学生を入学させるなどのシステムを構築して欲しい。



## (5)今後の会議運営について

福地会長から、今後の会議運営について、この会議は2年間4回の開催予定で、半分終了したので、提案・意見などがあれば、会長または、大学の方へ意見を寄せて頂きたい旨の依頼があった。

また、諮問会議の性格上、諮問に対し提言書を作成するような形態もあるが、会議開催回数等から、当面は、大学側から「個性化」等の事項を絞り問題提起を行い、それに対し、意見・提言を行い、それを纏めて評議会等で取り上げて頂く形態が良い旨の発言があった。

次回開催については、改めて委員の都合を照会し、開催日を決めることとなった。



## (6)池田学長閉会挨拶

長時間にわたり非常に貴重な御意見を聞かせて頂き、身の引き締まる思いであり、また、勇気を与えて頂いたと思います。今後の大学の生き方としては、国際化を掲げ、国際の場で対等に教育研究が出来ることを目指して長崎大学の教育研究の水準を上げ成果を求めていく。重要なことは、教官の資質の向上であると考えている。そのために、いろいろな施策を進めているところである。

本日、種々の御意見を頂いたので、もう一度整理をして、今後の進むべき方向の材料にさせて頂きたい。

## 4)長崎大学の「個性化」について(欠席委員からの意見)

長崎大学の「個性化」について考えるとき、最も重要な案件は「何故長崎大学で学ばねばならないのか」という疑問に対する明確かつ簡潔な解答を呈示することである。いわゆる動機付けの部分に相応の説得力が見出せなければならない。現在「大学」と名の付く教育機関は洋の東西を問わず無数に存在する事実を勘案すれば、長崎大学が他の大学とどう異なり一体何をどのような形で学生に伝授することができるのかについての明瞭な説明が求められるのである。

そもそも長崎大学の理念として「長崎大学は、長崎に根づく伝統的文化を継承しつつ、豊かな心を育み、地球の平和を支える科学を創造することによって、社会の調和的發展に貢献する」(『長崎大学・大学改革案』より引用)とあるが、その崇高な目標を結実させるためにも理念に基づいた実践的および専門的教育の拡充に最も労力が注がなければならない。それでは、その「個性化」に向けて如何なる方向性が確立され、具体的方策が如何様にして講じられるべきなのか。私自身の「放送」という仕事を通して思いつくポイントを簡単に挙げ、簡単な説明を付加したい。

## 1. 国際化

国際化の要素として、留学生及び外国人教員の受け入れや外国語教育の充実などが容易に考えられるが、21世紀はそれ以上の内容のある教育を実践しなければ非常に空疎な国際化に終始せざるを得ない。では具体的な目標とすべき国際化のあるべき姿とは如何なるものなのか。まず、実際に学生同志の密な交流を図れるよう授業内容を（学部学科によって実践の仕方に違いはあるが）検討すべきある。一つの教室に留学生を含めた学生が教壇に向かって淡々と授業を聞くだけの構図に終わらず、授業内での「ディスカッション」「プレゼンテーション」並びに授業外での「グループ・プロジェクト」の機会をできるだけ設けることのできるよう学習形態の在り方が変わるべきである。これは、学生レベルでの Interaction（相互作用）を通して人種・言葉を越えた相互理解を高める上で非常に有効な手段である。現に米国などでの大学では盛んに採られている授業形態である。さらに、語学の点にも留意すれば、外国語（主に英語）による授業の実施にも期待が寄せられる。現在インターネット上では80%以上が英語によって運営されている現実を考慮すれば、実質英語が世界標準語としての地位を確固なものにしていると結論づけても無理はない。であるなら、英語での授業実施は日本人学生の語学力向上の契機にも成り得るし、アジア近隣諸国のみなく非常に広範囲の世界から留学生を招来できる環境の整備にもなる。

## 2. 実践的教育の拡充

長崎大学はさまざまな学部学科を有する総合大学である。時代の趨勢によってその構図の变革を行うことは必要であろうが、ここでは既存の学部の更なる実践的教育・実用的研究の実施を提唱したい。例として「環境科学部」の一つの在り方について言及する。

「環境科学部」は、文字通り21世紀の人類のメインテーマとなる環境問題に対し、具体的解決方法なり巨視的展望なりの呈示を社会に迫られその期待に存分に応えることで存在意義を確認される極めて重要な教育機関である。逆に言えば、十分な情報を社会に発信できなければその存在の意味が見えない。故に、社会問題化している、また、これから問題化し得る環境要因に最大限の注意を払い、他の教育機関に先駆けて問題の解決方法を発信できるような努力が望まれる。例えば、日本の首都圏で大変な問題となっている「ダイオキシン問題」。この問題は、単なる首都圏の問題ではなく、国土の狭さ故に放置しておけばやがて地方をも圧迫する切実な問題である。そうした問題意識の下に、「ダイオキシン問題」を検証するのである。ところが、国内ではまだダイオキシン研究の歴史が浅く十分な研究成果が得られな

い。そこでその分野の先進国であるドイツでの研究をお手本とするのである。ドイツもかつては今の日本と同様ダイオキシンには相当悩まされていた。しかし、官民一体になって「ごみとは資源である」との認識を国民に植え付け、リサイクル及びごみ分別のシステムを徹底させ、ごみの放出量を劇的に減じさせ、ダイオキシンの脅威を取り去ることに成功したのである。こうした環境問題に対し、例えば長崎大学環境科学部がイニシアチブを取り、立派な研究成果と解決方法を発信できるならば、この上ない社会へのアピールとなる。ひいてはより多くの学生及び教育機関が長崎大学を注視するであろう。「個性化」に大きく貢献できるのである。

同様に、人口に膾炙する問題、例えば「有明海の干拓問題」や「雲仙噴火から学んだ災害対策」なども説得力のあるテーマとして相当の研究意義が見出せる。他の教育機関に先んじて地理的特性を生かし、国内だけでなく世界を送信対象として、情報の発信を目指すべきなのである。

以上が非常に簡単ではあるが、長崎大学の「個性化」についての私見である。もちろん、大学という大きな組織に望まれることは数え切れないほど多くのことがある。志ばかりが高く、どれもこれも中途半端に終わってしまうのでなく、社会にとって重要な案件から全力を投じて成果を得られることを第一目標にして、組織の営為がなされることが何よりも肝要であるとの共通認識の上に21世紀の大学のあるべき姿が形作られることを期待したい。



## (参考)

# 大学改革の進捗状況の主要項目

(池田学長説明概略)

### 1 組織運営体制の改善について

- (1)学長のリーダーシップを発揮するため、5月1日より学長補佐制(5人)を導入した。
- (2)学長、副学長、事務局長、学長補佐、事務局4部長による運営会議を設置し、毎月定期的に重要事項に関し、討議を行っている。

### 2 地域社会との連携協力について

- (1)長崎型の産学官連携推進のため、長崎大学内に産学官連携支援室を5月に設置した。
- (2)日蘭交流400周年事業の一環として、種々の事業を行ったが、その中で「サテライトキャンパス in 出島」を出島の中に開講した。

### 3 国際交流

日蘭交流400周年事業の一環として「国際学術会議2000」を計画し、6月から11月の6カ月間にわたり、合計10の国際会議を開催した。

### 4 大学評価

全学の自己点検・評価を行い、全国の国公私立大学の評価を行っている(財)大学基準協会へ検証(相互評価)を依頼し、12月に大学基準協会相互評価委員会委員3名が実施視察を行い、評価結果が3月に出される予定である。なお、結果については、委員の方に御報告する予定である。

### 5 特色ある大学造りのための平成13年度予算案(主要事項)

キャンパスの整備(総合教育研究棟の新営)が12年度補正予算に計上され、13年度概算で認められた分を合わせると建物面積約9,000㎡、12階建ての建物が建設される予定である。



長崎大学

発行・編集

長崎大学総務部総務課

〒852 - 8521

長崎市文教町 1 番14号

電話 (095) 847 - 1111(代)